

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

史的唯物論と「社会学」

滝野 忠・・・2

イデオロギーについて

どこへ私を連れて行くかとしているのか

藁輪 泰臣・・・3

― 結党の精神を忘れるな ―

悲惨な事件を無くするため

原野人・・・5

― マルクスと向坂から学ぶ ―

「業務改革・生産性向上」は搾取の強化 国労上野反合研・・・8

― 小島恒久著「経済学入門」の学習会を終えて ―

今次関生弾圧の経過と本質と

滋賀の警察について

稲村 守・・・9

読者からのおたより

・・・・・・・・・・・・12

刊 旬 社 会 通 信

NO.1291

二〇一九年七月一日号

二〇一九年七月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

史的唯物論と「社会学」

イデオロギーについて

読者の皆さん、イデオロギーとは何かをお考えになったことはありますか。19世紀後半、マルクスの唯物史観に対抗したマックス・ウェーバーの社会学、20世紀半ばからのアメリカ流社会学とマルクスの史的唯物論からの2つの理解があります。

イデオロギーとは一般的に、歴史的社会的に制約された考え方といえます。くわしく内容をみていきますと、アメリカ流社会学はイデオロギーをたんなる思想傾向、考え方と定義づけれます。これに対し、マルクスの史的唯物論は経済的・下部構造によって規定される政治・法律・道徳・芸術などの社会意識、したがって資本と賃労働の2つの階級の利害を反映する意識と規定します。

「レーニン『カール・マルクス』を読む」（本誌第1290号、6月15日付）で紹介しましたが、レーニンはマルクス主義とそれ以前（今も変わらない・筆者）の「社会学」の違いについて指摘しています。

「マルクス以前の『社会学』と編史とは、せいぜい断片的にかきあつめてきた生のままの事実の集積や歴史的過程の個々の側面の描写をあたえただけであつた。

マルクス主義は、いつさいのあい矛盾する諸傾向の総体を考察し、それらをさまざまな社会諸階級の、正確に規定できる生活諸条件と生産諸条件とに帰着させ、個々の『主導的』な思想をえらびだしたり解釈したりする点での主観主義と気まますを排除し、例外なしにあらゆる思想、あらゆるさまざまな傾向の根源が物質的・生産力の状態にあることをあきらかにして、経済的社会構成体の発生、発展、衰退の過程を包括的、全面的に研究する道をさししめした。」（レーニン全集、第21巻44〜45頁）

現代の資本主義国は、「敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級」に分かれました。「1%対99%」です。労働者階級が団結すれば、資本家階級は即歴史博物館行きです。支配階級は支配される者と「世界が違う」ことを本能的に知っています。ですから支配階級は労働者階級を分断し、相争わせ、競争を強いることで労働者階級の資本への怒りの本能、意識の成長、自覚を妨げることによって、意識を眠り込ませ、支配階級の下僕・奴隷とすることに力を注ぐのです。メディア・教育の統制、企業への労働者の忠誠の強制といった思想攻撃、あるいは直接の暴力―6月16日付の東京新聞は東芝の「追い出し部屋」を報じておりました―また買収の手段、方策、政策といったようにです。

独占資本や権力に買収され、彼らのシッポとなり下がった学者・評論家・文化人は、「保守と革新」、「右」と「左」が逆転し、かつての保守・極右とされた政党・政派が「革新」「左」になったと、おおまじめに論じています。（朝日、6月14日付「ひもとく―若者の政治意識」）。イデオロギーの定義にみたように、彼ら自身が正しい「保守」「革新」の定義をもちません。現象として現われている国民の意識の量を足し算するだけだからです。思想の「混乱」―とくに若者の保守化―は彼らの責任でもあるのです。

（滝野 忠）

どこへ私を連れて行くこうとしているのか

― 結党の精神を忘れるな ―

思い 社会主義 国鉄に就職して、配置された職場で社会主義青年同盟の先輩たちと出会う。この先輩たちに誘われるまま組合の青年部役員になり、国労の大川労働学校で学び、労働大学に通い、必然的に社会主義青年同盟に加入、社会党党员、社会主義协会会员として、働き、学び、闘ってきた。その後、社会党、社会主義協会が分かれる中で、私を育ててくれた先輩たちと考え方（路線）の違いから、私は新社会党に加入した。そして、新協会と言われていた社会主義協会に加入した。社会主義を目指す党、階級的立場を堅持し、国労闘争に惜しみない支援をする党に心ひかれたからである。「労働者の党」の健在を必要と感じたからである。

私は学者ではない。難しい分析などできない。しかし、これだけは言える。現場では日々熾烈な、異常な労働者管理に苦しめられながらも党员、协会会员（今は协会会员ではない）は必死に踏ん張ってきている。労働者は抵抗もできずに無言で耐えている。

「合理化」と労働者 私が44年間鉄道現場で働き続けてきて言えることは、会社は合理化をやめることはない。常に新しい合理化を考え、常に準備し、そして合理化を実施する。資本主義が続く限り合理化による搾取はより強力に推し進められ、嘆き悲しみ、苦しむのは労働者である。

0系新幹線は二人の運転士が新大阪まで交互に運転、210キロの最高速度で余裕あるダイヤ、精神的、肉体的にも余裕をもって運転業務をすることができた。仕事が楽しかった。（事故時にも相談しながら対応できた）。

300系新幹線車両の導入は、近代的システム構造となり、二人乗務の必要がなくなったとして、最高速度270キロで一人運転士となった。スピードアップは、乗務キロの延伸に結びつくようになった。（一日7時間乗務、スピードが上がれば上がるほど7時間内の乗務キロが必然的に伸びていく）。疲労度が増大していく。飛行機のブラックボックス（フライトデータ）と同様に、ICカードが設置され、運転操縦のデータがすべてわかるようになり、管理強化が強力に推し進められるようになった。データをもとに責任追及が行われる。（停車時のブレーキ扱いで、基本ブレーキ操作ができてないとして呼び出され、事情聴取され、状況により時系列、状況報告書提出となる）。

700系、N700系、N700系Aと次々と新しいシステム搭載の新幹線が導入され、現在は最高速度285キロ走行となった。

スピードアップは過密ダイヤを生み出し、1分1秒が問題にされるようになった（遅れを取り戻すことができないし、後続列車への影響が即生まれてくる）。余裕を持つことができず、常にミスにおびえ、不安な中での運転業務が強いられている。

搾取の強化 会社の搾取はすごい。一人になった運転士、もう一人の運転士はいえは車掌として働かせる。運転士が運転士として扱われることはない。会社の儲けのための道具としてしか見ていない。今日は運転、明日は車掌、これもひどいが、今は一つの行路内に、運転士業務、車掌業務が混じるまでになっている。そして、東北新幹

線の無人運転、山手線の無人運転化が始まろうとしている。出向、配転は当たり前となる。駅業務から車掌業務、車掌から運転士になり、また駅業務へ配置、「還流制度」の導入である。人間疎外を生み出している。

労働者支配はJRだけに限った話ではない。様々な業種で起きている。これが資本主義である。だからこそ、「人間の回復」に向けた社会主義社会を目指しているのである。搾取のない社会である。

資本主義の現実 その一 新社会党の任務は、圧倒的多数の労働者の苦しみに手を差し伸べることである。どんな小さな職場、どんな小さな組合でもそこに寄り添いながら、労働者に勇気を与えることである。

一年前の出来事を伝えたい。トヨタ自動車関連の職場で働く一人の支店長から相談の電話が入った。「労働組合を作りたいので相談に乗ってほしい」とのことであった。

彼は後日、私の家に来た。(彼との出会いは彼が新米で車販売のお願いに来た時話に乗ってあげたのがきっかけ、以降、車のことで相談する付き合いである。私が労働組合の役員をしていることも、大変な職場で働いていることも話していた)。

数十の支店があるトヨタの関連会社、彼が組合を作りたい理由は、強権的な社長が職権乱用で簡単に配置転換を行ってくる。ある支店長(人間的にいい人)が大変ないじめにあっている。このままだと、誰もが社長の思い通りにやられていく。組合を作って交渉したい、ということであった。私は一年間かけて組織を作り上げないと数人ではつぶされる、との思いもあり、定期的な打ち合わせをしあいながら労働組合結成を目指すことで話し合ってきた。彼は、他方でパソコンを調べていて、労働相談機関にも相談していた。その組織の指導で組合を早々立ち上げて労使交渉に打って出た。結論的には、労働組合はつぶれ、彼は首謀者として配置転換になってしまった。

管理者要請講座にも数泊で参加している彼が、「労働組合の必要性」を認識せざるを得ない現実が生み出されている。これが資本主義社会の現実である。

資本主義の現実 その二 もう一つ紹介しよう。わが息子の職場の話である。彼は出向で子会社の現場業務を行っている。多くの社員が4年制大学を出ている。息子は総支給額で400万少し、手取りで300万少しの賃金、子供が二人いる。息子はたまに会うと「大学出ていてこんなに安い、給料が上がらないから、職場をやめる人が出てきている」と話す。

彼の職場には組合はなく、組合の必要性もあまり感じていない。しかし、彼らは行動を起こした。社長の息子が後を継ぎ新社長になった。この新社長に対して数人で出かけて、交渉をしたと話す。「こんなに安い給料で、今後上がらないのであればみんな辞めていきますから」と訴えた。社長は「考えさせてくれ」との返事だったという。このように、労働者は我慢の限界にきている。これが資本主義の現実である。

ぶれるな、原点に帰れ 新社会党は、誰のための党なのだろうか。私が新社会党に入したのは、このように嘆き、苦しんでいる労働者に正面から向き合い、労働者とともに歩む、そして社会主義社会を本気になって追求していく党であるからである。わけのわからない英語を訴える党ではなかった。新社会党は私をどこに連れて行くことしているのか。結党の精神を忘れるな。

マルクス、エンゲルス、レーニン、向坂逸郎、岩井章、灰原茂雄の勉強をしてきた大先輩よ、私よりも古典を勉強している先輩たちよ、ぶれるな。原点に立ち返れ、と言いたい。労働者を信頼しなくて社会主義の実現などない。(蓑輪 泰臣)

悲惨な事件を無くするため

―マルクスと向坂から学ぶ―

元文科事務次官の前川喜平氏は深刻な真実を次のように述べている。

【川崎・登戸で起きた小学生ら二十人殺傷事件。悲しい思いがこみ上げる。だが政権は、このような事件も自らの支持拡大に利用する。人々の憤りに訴え、悲しみに取り入る行動をとるのだ。「緊急閣僚会議」の開催はその典型的な手法だ。

事件翌日の五月二十九日、安倍晋三首相は緊急閣僚会議を開き、「強い憤りを覚える」「安全を何としても守らなければならない」「政府一丸となって早急に取り組む」などと発言。テレビも新聞も大きく報道した。こうした緊急閣僚会議は、悲惨な事件が起きるたびに催される恒例行事のようになっていく。

二〇一六年の津久井やまゆり園事件後の閣僚会議では(中略)。二〇一八年の結愛ちゃん事件後の(中略)。その十ヵ月後、心愛ちゃん事件が発覚するとまた(中略)。かっこいい台詞はすべて官僚の作文。首相はそれを読んでいるだけだ。心にもない芝居。国民に「やっつてる感」を植え付ける見せ物。それが緊急閣僚会議なのである。】(東京新聞6月2日)

前川さんは今は現代教育行政研究会代表として活躍されている。

ほとんどの高級官僚が独占資本とその政権におもね、嘘やおべっかや付度や偽装や改ざんの中に身をゆだね、自民党や維新などの議員とともに退廃、墮落の底に沈んでいる中で、現役の官僚時代から、筋を通してこられた前川さんは、緊急閣僚会議と安倍首相の真実を暴いている。閣僚会議が何度開かれ、安倍首相が何をしゃべっても、深刻な事件や悲惨な事故は少しも減らないどころか増えている。

二

これらをなくするには何が必要かは、向坂がマルクスによって次のように明らかにしている。たいへん長くなるが、マルクス主義の核心であるから、向坂著『資本論と現代』(法政大学刊)から引用する。

【……世界市場網への世界各国民の組入れ、およびそれとともに資本主義体制の国際的性格が、発展する。この転形過程のあらゆる利益を横領し、独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隸従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する。

資本独占は、それとともに、且つそのもとので開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなるところの一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。

収奪者が収奪される。」(『資本論』、岩波文庫版、第3分冊、414～415頁)

マルクスは、「資本主義的蓄積の一般的法則」の分析から、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」をこのように導いている。

資本主義的蓄積の一般的法則は、一方では資本の集積と集中とをもたらすとともに、他方には労働者階級の側に「窮乏、抑圧、隸従、墮落、搾取の度の増大」を生む。これは、むしろ、その国の歴史的・社会的条件によって、ちがった形態をとる。しかし、この法則は必ず貫徹される。

しかし、資本主義的蓄積の一般的法則の意味するものは、このことにとどまるものではない。「絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する。」資本主義的蓄積の一般的法則が、単にいわゆる「窮乏化法則」と考えられている「窮乏、抑圧、隸従、墮落、搾取の度の増大」のみを意味するものであるならば、社会主義革命の主体は生れない。この一般的法則がいわゆる「窮乏化」とともに、労働者階級を結集し組織する作用をもつから、社会主義革命という量的発展を質的に転化させる行動する社会的要素が生れるのである。社会主義に発展する資本主義の必然を、人間の自由な行動に転化させる歴史的な力が成長する。この点を看過して、『資本論』の「学問的」せんさくや、章別の順序などをみあげつらうペダントリーは、ブルジョア大学の閑人にまかせておけばよい。(中略)

「人間の歴史をつくるのは人間じしんである。だが、好みそのままにでなく、自分でえらんだ情勢のもとでもなく、目前にある、あたえられた、伝来の情勢のもとでつくるのである。」(マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』、新潮社版『マルクス・エンゲルス選集』第6巻、9頁。岩波文庫版、17頁)(中略)

資本主義社会のつくり出した物質的・社会的条件にしたがって、労働者階級は、新しい歴史をつくる。労働者階級による国家権力の掌握は、歴史的な法則の必然を、彼らの自由なる行為に転化することである。『資本論』は、「近代社会の経済的運動法則」を明らかにした。『資本論』はこのことによって資本主義の中に社会主義社会の必然を証明する物質的・経済的条件と、この条件を自由な歴史的行為に転化する階級の存在を自日のもとにおいた。

「自由とは必然性の認識である。……自由は、自然法則からの夢想された独立にあるのではなく、この諸法則の認識にあり、そしてこの認識と結びつけられているところの、この諸法則を計画的に特定の諸目的のために作用させる可能性にあるのである。」(『反デューリング論』、新潮社版『マルクス・エンゲルス選集』第11巻、107頁)と、エンゲルスは、ヘーゲルに拠つてのべている。

われわれが、自然の諸法則を認識し、これに依拠して宇宙船をとばすことが出来たからといって、自然の法則はなくなるならない。エンゲルスが言うように、いわゆる「窮乏化」を絶対的に言うのではなく、労働者階級の抵抗によって、これがある程度阻止することができると考えなければならぬ。しかし、このある程度の阻止が可能であるということは、このことによって、資本主義的蓄積の一般的法則がなくなることの意味しない。この阻止を可能にした労働者階級の組織された抵抗力が弱くなれば、

一般的法則の作用としての「窮乏化」は、その姿を露わにして、資本主義的蓄積の一般的法則が、厳存することを示す。

資本主義が存する限り、資本主義的蓄積の一般的法則の含む「窮乏化」は作用する。その意味で、資本主義的蓄積の一般的法則とその「窮乏化」の作用は、絶対的である。同時に、労働者階級の抵抗なくしては、人間の肉体的存在すら否定される限度まで作用する、という意味においても、この作用は絶対的なのである。

このことは、労働者の組織、抵抗のもとにあっても、極貧層のプロレタリアとルムペン・プロレタリアのいろいろの種類が、高度に発展した資本主義国に増加し、自殺者、殺人、犯罪者、被救護人口の増加等々に現われている。資本主義下におけるあらゆる頹廃現象は、資本主義的蓄積の一般的法則の絶ゆることのない作用を示している。むろん、これらの現象は、時代と国とを異にしたがって、ちがって現われる。】

（向坂逸郎「人間疎外と『窮乏化法則』」、法政大学出版社『資本論と現代』60〜65頁）

三

残酷な殺傷事件の後に自殺した容疑者に対し、「死ぬなら一人で死ぬ」という言葉がネット上を飛び交ったという。もっともらしいこの言葉も一つの頹廃現象である。このような容疑者が犯罪を犯すに至った原因をたどると、資本主義的蓄積の一般的法則とその「窮乏化」の作用が必ずあるといつてよい。

単なる事故と思われる場合も、遠因を見ると、この法則の作用と無関係ではない。向坂先生が述べているように、資本主義的蓄積の一般的法則とその「窮乏化」の作用は、労働者階級の抵抗によって、ある程度は阻止することができる。しかし、資本主義的蓄積の一般的法則がなくなつたことを意味しない。阻止を可能にした労働者階級の組織された抵抗力が弱くなれば、一般的法則の作用としての「窮乏化」は、その姿を露わにして、資本主義的蓄積の一般的法則が、厳存することを示す。

総評・社会党がなく、今日のように労働者階級の組織された抵抗力が弱くなれば、一般的法則の作用としての「窮乏化」は激しくなる。極貧層のプロレタリアとルムペン・プロレタリアのいろいろの種類が急増し、自殺者、殺人、犯罪者、被救護者、引きこもり、いじめ、DV等も激しく増加している。

資本主義下におけるあらゆる頹廃現象は、資本主義的蓄積の一般的法則の絶えざる作用を示している。独占資本が支配し反動化する時代には、「窮乏化」とは縁がないと思われる資本家階級とその政治的代理人や行政官をも頹廃させずにはおかない。

なお向坂先生は宇野さんを強く批判したことはない、などと思っている人も研究者や指導者の中にあるようであるが、この一論文を味読するだけでも、先生が名前こそあげなくとも宇野さんをいかに厳しく根本的に批判しているかは明らかであろう。マルクスや向坂はいい加減な読み方では読まないも同然である。

四

【『資本論』は、単なる科学の書ではなく、革命の書である。いな、真に科学の書であるから、革命の書であるのである。】

「資本論の論理と社会主義とを直線的に結びつける」から、革命の書なのではない。資本主義の発展は、基本的な法則の上に、無数の複雑な副次的な法則を展開させる。

それは、資本家階級の抵抗によって、さらに細かな障害をもちきたす。労働者階級の主体的な行動は、この複雑な歴史的法則に適応し、細密に資本によって張りめぐらされた障害物をのりこえなければならぬ。労働組合運動や社会主義的革命運動は、労働者階級の主体的行動であるが、その具体的な展開が、克服しなければならぬ困難は、無数に横たわっている。労働者階級の闘いの戦略や戦術は、客観的な歴史的法則の必然をどのように、主体の行動の自由に転化するかの方法を確立するものでなければならぬ。『資本論』が革命の書であるのは、これら一切の歴史的行動に科学的な根拠を与えるからである。】(向坂『資本論』の意味するもの、前掲書 84〜85頁)

我々は可能なあらゆる場でマルクスや向坂を学ぶことによって、「窮乏化」を生む法則に抗し、資本によって張り巡らされ障害物をのりこえ、無数に横たわる困難を克服しながら、歴史的法則の必然を実現する道を歩む以外に、人間らしく生きる道はない。

(原 野人)

「業務改革・生産性向上」は搾取の強化

— 小島恒久著『経済学入門』の学習会を終えて —

J R 東 新しい労務政策

J R 東日本は、社員の約4分の1を占める国鉄採用世代が今後5年間で職場を去る(昨年4月1日現在のデータ)最後の世代交代を迎えるとともに、生産年齢人口の縮小による鉄道収入の減少、新規採用世代の減少による人材確保の困難という深刻な課題に直面している。そのため、昨年の東労組との決別、深澤社長の誕生を機に、これまでの「労使共同宣言」を中心にした労使関係の枠組みを改め、「新たな時代ヘスタート」という言葉を使いながら、労働組合不要の新しい労務政策に転換した。

昨夏には「経営ビジョン変革2027」を発表し、深澤社長が「これまでの30余年とは違った新たな企業グループに生まれ変わる」(「JRひがしNo.376」と公言しているように、「業務改革・生産性向上」を旗印にした息もつかせぬほどの「変革」「制度改正」(＝合理化施策)提案の嵐が職場を覆っている。

より少ない要員体制でこれまで以上の鉄道輸送量を実現し、営業収益をさらに伸ばそうと企んでいるから、その無理なしわ寄せはJR現場で働く労働者、関連労働者の労働強化へと向かわざるを得ない。それは、鉄道の安全やサービスの低下にも直結している。「生産性向上」＝人減らし合理化に反対する、国労の姿勢・役割が大切になってきている。

資本主義社会における「生産性向上」の役割

小島恒久氏が書かれた『経済学入門』という新書版の本を、青年部の頃に読んだ記憶のある国労組合員も多いと思われる。小島恒久氏(1926〜2019年)は、向坂逸郎氏と共に三井三池炭鉱で九州大学在職中労働者教育に携わり、のち九州大学名誉教授などをされた。この『経済学入門』は1963年「労働大学」から発行され、今日の社会のしくみを変えたりやすく学べる本として、長年労働者に支持されてきた。

上野反合研はこの本をテキストに、一昨年11月から今年5月まで全18回にわたり、

学習会を行ってきた。参加メンバーは社会通信の滝野さんを含め13名。平均して毎回7名ほどが参加し、交代でレポートを作り、賃金は「労働力の再生産費」なのか「企業のもうけの分け前」なのか、「働き方改革」「生産性向上」とは労働者にとって何なのか、「社会主義の必然」というのが誰が担うのか、どうして必然なのかなど、いろいろ議論してきた。

平成採用の若い仲間は何をどう語るのか

今の国労にとって、資本主義とは何か、資本とはどういうモノか、労働者の未来は・・・について労働者がしつかり認識して労働運動を強めていくことが求められていると思う。国労組合員の場合、「自分は労働者」であり、「お互い競争しない」「仲間や団結が大切」という価値観が共有されており、とても素晴らしいことだと感じている。これも、先輩たちの反マル生闘争・スト権闘争を受け継ぎ、分割民営化反対から四半世紀にわたった国鉄闘争を闘ってきたからこそ、共通の思想的財産だと思う。しかし今、平成採用の若い仲間を「国鉄労働組合」に加入するよう誘うにあたり、先輩としてどのように話をしたらよいか困っているという声を時々耳にする。中には「国鉄」が問題であるかのように言う人もいるが、本当は「労働組合」というハードルが乗り越えられないのが問題ではないのか。

労働組合は職場の単なる仲良しグループではない。「会社は組合加入で差別してはならない」のは当然だが、「会社から良く見られない」のも昨今の厳然たる事実であり、「人間関係」だけでは加入していただけないのもそれが原因である。だからそこは、隠したりごまかすべきではない。何故よく見られないのか。

今の社会において、会社と社員、会社と労働組合はどういう関係にあるのか。そもそも「社員」と労働者はどう違うのか。会社によく見られなくてもかまわない、それ以上に職場・会社で「許せない」と思うことにはあるのではないだろうか。

今の社会において、資本と労働者の利益が相反する以上、長時間・休日労働なり、仕事の過重責任なり、パワハラ・セクハラなり、管理者の不正なり、必ずそういう事象は職場にある。そこに疑問を持つ若い仲間の声が聞こえてくるようになれば、「労働組合のハードル」なんて高いものではない。そのような声に耳を傾けられる先輩でありたいと、反合研は学習を積み重ねている。

(国労上野反合研)

今次関生弾圧の経過と本質と滋賀の警察について

弾圧 周到な準備 複数の信頼できるマスコミ関係者によると、今回の滋賀県警の弾圧に発する2018年7月以来の国家権力による関生弾圧は、警察が10数年前から近畿ブロックで、連帯ユニオン関西地区生コン支部に狙い定めて弾圧の検討を積み重ねていたものと言う。

それで滋賀県警は警備課・公安警察ではなく、暴力団対策の刑事部組織犯罪対策課が出勤して、「おれらは公安みたいに甘くないで」と言い、「本部(警察庁)からの指示だ」と言い、「労働組合は企業内でやるもんだ」とも言い、「これでコンプライアンスはもうできへんやろ」とまで放言している。これらの関生組合員逮捕時の現場刑事の

セリフは、問題の本質を分かりやすく端的に示しているものとして永嶋弁護士に紹介され、あまりにも有名になっている。

これは推定の域を出ないが、10数年間の検討・準備をふまえ、第3次安倍政権で「花開き」、2018年4月11日の彦根交番事件(彦根の警官が業務中、警察の拳銃で上司を射殺)をはじめとするセクハラ・パワハラ・交通事故等々の様々な滋賀県警の不祥事をごまかし、またその「弱点」のゆえに東京の本部の指示を断れなかったのではという見方もある。

「彦根交番射殺事件」1周年の日に この私の「不祥事ごまかし」説は、2019年4月11日のこの前代未聞の「彦根交番射殺事件一周年」の日の武委員長の再々再逮捕によって、滋賀県警自体が立証してくれた。別に、私の偽造した陰謀史観ではない(2019年4月11日前に私は反弾圧実行委のFBで主張している)。その「おかげ」で、本年4月11日の晩のびわ湖放送テレビは彦根交番事件にふれず、武委員長再々再逮捕一色となった(NHK大津放送局のテレビはそうもいかず、両方とも報道したが、「薄める」ことはできた)。

なぜ関生、滋賀か また、なぜ関生か、滋賀か(狙われたのは?)ということでは、中小生コン経営の協同組合運動と労働運動を両輪として、まさに経団連会長が述べているように、「資本主義の根幹を揺るがす」運動を関生支部が展開して大手ゼネコンの収益第一主義に対決し、そこをレイシストグループが介在して問題を深め、広めてきたことがある。そして、関生支部が京阪神・近畿などの階級的労働運動や沖縄連帯・反原発・護憲などの大衆運動の先頭に立って、辺野古現地にまで生コン車の大デモンストレーションを展開してきた、これが安倍政権の官邸中枢まで伝わり、本年6月末の大阪G20対策をさせたと言われてきた。

2019年6月2日の京丹後米軍Xバンドリーダー基地撤去現地集会で、関生支部・坂田副委員長がこれらの活動を報告され、滋賀からの初参加の労働組合員から、「沖縄・辺野古も、Xバンドも反原発も安倍政権打倒も参院選も関生弾圧もすべてつながっていたんだ。そのことがよく分かった」と思いを帰路バス車中で報告していただき、こちらに改めて関生弾圧の本質に思いをはせたということがあった(反弾圧実行委のFB掲載)。

滋賀が狙われたのは、京阪神と比べて関生支部は頑張っではいるが、独自の闘いとなっていて、地域労働運動との結合が他と比し若干手薄であった感は否めないし、市民運動は滋賀の私たちの弱さでもあるが、今まで滋賀県内での接点はあまりつくれてなかった。そこが狙われた感もあるし、この点は警察側の「けがの功名」かもしれない。

“**かななま勝手連・しが**”**”結成”** 昨夏、初期の大津警察署前抗議行動でこのことを直感して(地元が少ない)、びわこ放送KKへの「ニュース女子」報道差止申し入れ行動の緊急必要性もあったので、滋賀の反原発などの仲間と相談し、“かななま勝手連・しが”結成に至った。それと言わずもがなで誰も今まで触れていないが、関生支部を狙うことによって、支援の可否をめぐって、「野党共闘」や「総がかり行動」を分断できるかもという副産物も、安倍政権は(元左翼・革新の類の人間による「ご注進」などで)狙っていたのだろう。

そして現在、6月末のG20で弾圧は止まるのか、はたまたそのために関生以外の労組・市民団体にも弾圧が及ぶのかは予断を許さないし、大津地裁で進行している湖東生コン協組「事件」公判は来年の2月14日の公判日程まで決定されている。残り6名の関生組合員の奪還がいつになるのか、滋賀でさらなる逮捕もささやかれ、追起訴（ついついつい・・・）も公判のたびに滋賀地検はほのめかしているし、去年「日野町事件」（酒店女性を絞殺、強盗殺人）で再審決定出したとかいう裁判長は終始ひとり出てきて、主体性のない、警察・検察言いなりの恥ずかしい状態を隠そうともしていない。

デモ申請 滋賀と京都 そんなこんなに通奏低音に28年前まで京都府民であり、京都で今も労働運動にはかかわって総評地方オールド45年の小生が感じているのは、滋賀県の警察の市民（労働者・労働組合も含めてか）をなめ切った態度である。

これは京阪神では少なくとも表面上はあんまりないことであり、はっきりと違いを明言できる。痛感したのは、3年前、5月連休5日間で750人にご参加いただいた「原発全廃・びわこ一周デモ」のデモ申請時である。県都・大津署とあいつ野のある高島署を除いた県内各地の警察署の市民運動のデモ申請への対応は、ひどいの一語に尽きた。最初から「デモ申請など認める気もないという態度で、「あさって来い」とか、「地図がないから3時間後にせよ」とか、「ちよつと待って」と4時間待たすとかはざらで、あれでは気の弱い市民運動のメンバーならもうデモなど全く断念するだろうし、電話予約なしにデモ申請手続き全てを15分で終われた勤務先最寄りの京都市の中京警察署が、こよなく民主警察のように思えた。

それでいて、県内各地の警察署はこちらが行く前から、私たちが2万枚を越えて印刷し配布しているびわ湖一周デモのチラシは持っていた、県警本部と事前に連絡を取り合ってもいたのである。当然、正直言つて、共産党や社民党や当時の民主党・民進党などの政党と、連合や全労連の県・地域組織の日常の活動の根本的問題も感じたが。2011年5月8日から大津市内で積み重ねた「脱原発市民ウォークin滋賀」の私たちの積み重ねがなければもともっと困難を極めただろう。びわ湖一周デモはその毎月のデモの50回記念で実施したのである。毎月のデモ申請担当のOさんの、県内各警察署の警備課に人事異動されていた元大津署員の知り合いがそれぞれいたので、まだいろいろ前向きに仕事をさせることができたのだった。

反弾圧実行委員会のFBにも掲載しているが、先週6月5日の滋賀県警・大津地裁への中央平和フォーラム・関生支部・連帯ユニオン本部・反弾圧（大阪）実行委員会・同京滋実行委員会（かなま勝手連・しが）の中心メンバー7〜8人が署名提出行動を行った際の前代未聞のひどい対応は、滋賀では日常茶飯であり、これら「お上」に逆らうものなど日ごろ県内ではありえない、想像もつかないという（相手の）感じなのである。

強制逮捕・家宅搜索 大津地裁の承認印によってではあるが、午前3時に組合員宅に強制逮捕・家宅搜索で幼子は泣きわめく、関生組合員の妻は自分の下着が入っているタンスまで勝手に見ず知らずの男性捜査員に開けられて心の病に陥る、取り調べ中もしつこく刑事が不当労働行為をし、妻にまで「完全黙秘などしてたら一生出て来れないぞ。あんたからまだそんなに労働組合をやめるように言え」など、時計が74年前に戻

つてしまったようなことが、今もお続けられている。

この間の関生弾圧事件公判の天津地裁傍聴者はすべて感想で言われるが、法令順守の大手ゼネコンなどの作業現場回りの関生支部によるコンプライアンス活動など、何の問題もないのに、そして改めないからビラを路上で数十分、数枚撒いただけで威力業務妨害罪容疑だとか、恐喝容疑だとかで不当逮捕・勾留など信じられない。いかに紳士的に法違反事項の指摘・要請行動をしていたかは検察自体が証拠で明らかにしてくれている。相手側証人もすべてそう言っている。

だから、琵琶湖大橋で50歳歳の市民を、よそ見していた自転車の警官が衝突して殺し、70万円の罰金で終わり、所属長のコメントも無しなどということは断固告発し、市民宣伝で訴える必要があると思う。毎週土曜日の市民宣伝ではこちらがびっくりするくらい、一般市民が警察抗議の署名をしてくださっている。これをさらに広げ、10ヵ月以上も不当勾留されている残る6名の仲間を早期奪還したい、その一念である。他意はない。いろいろ舌足らずな失礼の段はお許しいただきたい。

〔2019・6・11 稲村 守（かんなま勝手連・しが）〕

◇ 読者からのおたより ◇

来春 市議選で5期目の挑戦 早速プリントアウトしました。福山市議会でも ペーパーレスになりましたが紙媒体にして確認しています。省資源になっていません。引き続きよろしく願っています。5月の福山支区定期大会、6月の広教組定期大会で、来春の市議選での5期目の挑戦が決まりました。先ず参議院選での勝利からです。
(広島県福山市 西本章)

チラシ配りの力に替えて 毎号、誇り溢れる立派な画面に、ただ、頭の下がる思いでございませう。世の中すっかり世論操作に操られて、きつと皆、精神もおかしくされている気がいたします。ここまですらられても、TVで歓談している有権者の姿から、《戦争被害とその記憶が払しょくされた》ように見えます。恐ろしいし情けない気分です。活動した時間や紡いだ紙は…、山ほどの己の力不足、反省気分を、チラシ配りの力に替えてまいります。

それにしても、「合成洗剤追放」説明のための知識や原料生産量の推移など、通産省資料等々、メーカー側の事情の説明資料を頂けたことで、ちっぽけな議会での不毛だった議論が紙芝居みたいに面白くなり、素人なりに公私とも「安心につながる」結果が出たことは、婦人会議と、党政審の応援がなければ手を付けられない世界で有難かったの一語です。「洗剤効果」は、行政の窓口でも活用され、市民課の出生届けの窓口にも《赤ちゃんには石鹸を》のパンフが20センチぐらい積まれました、の日々でした。みんな、日本社会党と日本婦人会議のお蔭で、成果でございます。婦人会議と日本社会党の「あれ」が無かったら、柏市城の《子供や大人の皮膚疾患や他の疾患等、公衆衛生調査結果》は違う形となったかもと私は確信しています。そして今もってまだお世話になって、恐縮です。でも嬉しいです。多謝！
(千葉県柏市 柳田祥子)

高裁での闘い お陰様で『相双の会』会報85号を発行することができました。原発事故関連の裁判が地裁においては判決が続きますが、全てが控訴となり高裁での闘いとなっておりまして。地裁、高裁での意見陳述、本人尋問で被害の状況を数多く訴えてきておりますが被害者には何の落ち度もないにも関わらず判決内容は被告側に沿った判決内容となっております。

三権分立は権力の濫用を防ぎ、国民の権利と自由を保障するなどと言っていますが、日本の司法とは何なんだと疑問を持たざるを得ません。とは言っても、私たち被害者、庶民には何の権力もありませんから司法に委ねる他ありません。今後も会報を通して皆様のお役に立てればと思っておりますので宜しくお願いします。
(『原発被害者相双の会』 國分富夫)